

# 観光事業の現状と将来

植 田 英 武

ともすれば、自然保護の立場からは継子扱いにされがちな観光業者（一年生）に、貴重な紙面を割愛して下さったことを心から感謝申しあげる次第である。

「観光事業の現状と将来」というようなテーマのご依頼であるが、結局、自然保護に対するわが社の考え方と、大雪山の施設を伸ばして行きたい悲願を、クドクドと述べた支離滅裂な内容になってしまったのはお恥かしい次第である。が、これも単なる物見遊山でない、ほんとの観光に寄与してゆくことをねがうあまりのくり言と、ご有怨ねがいたい。

## (1) 最近における観光事業の動向

最近における観光旅行は、確実に一〇％程度の伸びを示しており、逐年上昇の一途をたどっている。

この原因は、国民所得が増加し生活水準が向上したことによって、食料品などの基礎的消費からの余裕が教育費、娯楽費などの選択的支出に移り、その比率が高くなったことによるものであって、国民生活の安定向上の一証としてまことに喜ばしいことである。今後はさらに生産性の向上に伴い労働時間が短縮され、週休二日制や夏期休暇制実施の普遍化などが進むであろうから、ますます観光客が伸びるものと大きい期待が持てる。

最近五カ年の全国観光客の動向を厚生省の統計から見ると、表①のとおりである。

北海道における観光客数およびわが社の事業地である層雲峡地区について見ると、表②のとおりである。

単位 100万人  
表① 全国観光地への入込み観光客数調

年 度	昭36	37	38	39	40
入 込 み 数	500	568	628	691	750
前 年 度 対 比		114	111	110	109

四十二年度における層雲峡地区は九月現在で八八万人を超えているので、年度集計では一〇〇万人を突破することは確実と見られる。

表②のように北海道

表② 本道と層雲峡における観光客数 (単位千人)

年 度	昭35	36	37	38	39	40	41	
北海道計	総入込み数	13,757	15,853	19,910	20,988	26,196	29,456	30,693
	前年度対比		108.8	120.3	104.3	109.0	112.3	104.2
	前年対比	100	108.8	132.3	138.6	159.0	183.6	190.3
層雲峡	総入込み数	458	503	577	712	754	917	933
	前年度対比		110	115	123	106	122	102
	前年対比	100	110	126	155	165	200	204

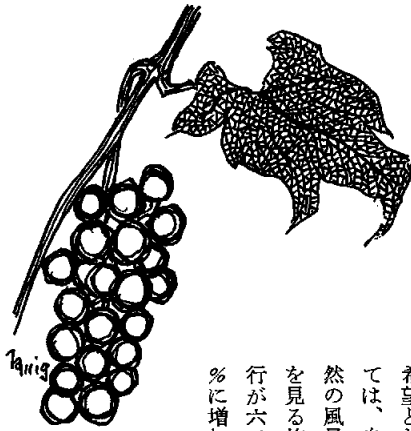
道観光客は順調に伸びているのであるが、特に層雲峡地区はその中心地的な存在といってもよく、表③のように道外観光客の比率がもっとも高いのは単的にその性格をあらわしているもので、それだけ将来への伸びと安定が期待される。

観光客の内容を見ると、最近、農村地帯の人々が目立って増加している。

これは豊作つづきで農村の経済が好転したこと、農作業の機械化、省力化などで時間的にも余裕が出てきたことが原因で、心理的にも農村の人達が旅行づいてきたといえる。旅行者者はこれを「出ぐせ」がついたという。豊作を契機にしてついた癖は習慣として固定したわけで、将来においても、もっとも安定した大きい観光客層となるものと思われる。

## (2) 自然保護と観光業者としての心構え

物質文明の進展高度化につれて、人間の自然への憧れはますます強くなるものといわれているが、交通公社調査による家族観光旅行目的の過去一カ年間の実態



は、自然の風景を見る旅行が三八% 温泉旅行が三八% 登山・海水浴のため旅行が二四% であったが、今後一カ年の希望としては、自然の風景を見る旅行が六二%に増加

表③ 昭和41年度主要観光地道内道外客調 (括弧内は%)

入込み数50万人以上の観光地(都市は除く)

	大沼	登別	洞爺	支笏	定山溪	朝里川	ニセコ	石狩	層雲峡	阿寒	知床	網走
道外客	231 (29)	564 (30)	623 (35)	207 (24)	546 (31)	168 (28)	86 (14)	3 ( )	554 (59)	271 (52)	266 (50)	407 (46)
道内客	553 (71)	1,302 (70)	1,147 (65)	648 (76)	1,235 (69)	423 (72)	529 (86)	678 (100)	379 (41)	247 (48)	263 (50)	480 (54)
計	784	1,866	1,770	855	1,781	591	615	681	933	518	529	887

し、首位に立っている。この傾向は全般的にもあらわれているのと思われ、経済的時間的に余裕の出き

た人達は、第一次に温泉旅行などを主とするが、逐次、景勝地などの観光に比重が移っていくものと思われる。

これは、景勝地や大自然を対象として施設をしている観光業者にとつてまことに喜ばしいことであるが、手放しで喜んでばかりもいられない。たぐさんの人達のなかには、物見遊山のような気分のまま大自然の中に押し入ってくるような人も少なくない。このような人達は自分のものは大事にして他人に侵させまいとするが、公共的なものに対する考え方はまだまだルーズで、ことに自然物に対する観念は一層乱れている。

しかし、いつまでもこのような状態であつてはならぬし、たゆまぬPRと保護監視によつて矯正できることを確信している。勝れた景勝地、豊かな大自然は、限られた人達のものとして温存するべきでなく、特別の保護を必要とする地域以外は、施設の完備と保護管理の完璧を計つて、広く一般大衆の手の届くものとなるよう開発がなされ、またこれが、最善の状態を将来に受け継がれて行かなければならない。

観光業者はその利用開発手段の一部を実施させてもらうわけであるが、単なる目先の企業本位のものの考え方から利潤の追求のみを計り、自然保護に対する努力を怠

るようなことは許されないし、またそのような態度は自殺行為に等しいものである。

自然保護と利用手段を調和させて行くことは、企業者としても当然分担すべき責任であるし、また企業を防衛し、さらに繁栄させる途でもあると考える。

一旦破壊された自然はふたたびこれを復元することは至難であり、汚された環境により観光客へ与えた悪い感情はとり返しつけないものとなる。多額の投資をして、その対象とする自然が一顧にも価値のないものとなったのでは施設は死物と化し、企業は、崩壊の途をたどらなければならぬ。

また、自然を愛護する心の侵透は、観光客の層をますます厚くすることとなつて、企業の安定と繁栄につながるだろう。ここに観光業者としての、自然保護に対する心構えが生まれるものと思う。「自然を愛護し、そして私達もその調和の中に」これがわが社の事業運営の根本方針である。

ロープウェー建設に当たっては、従来のように路線の下を全部伐開するようには極力避け、送電線も多量の立木の伐採を要する箇所は地下ケーブルにするなど、建設費を惜しまず自然の保護に努力したつもりである。

私達は決して大自然への侵入者となるの

ではなくて、謙虚な心で調和して行かなければならない。そこに人間の善意をもちあげ、人と自然の風物、小鳥や動植物などが一体となって融和して行く場を作るのがわが社の希いである。

高山植物の保護、環境の美化清掃のためのPRや、実践も積極的に行なっていく。やがては餌付け中のシマリスも、観光客の周囲を遊び廻るようになるだろう。

### (3) 国立公園の恩恵を広く

ロープウェーの建設工事中的ことであった。旧登山道で休息している関西の女子短大生に心易く「来年もまたいらっしやい。ロープウェーができるから楽になりますよ」とご愛想のつもりでいったところ「ロープウェーができたら来年からはもうきません」と、ピシヤリいわれたことがある。確かにその気持はわかる。汗を流して頂上に立ったときの喜びの大きさは否定するものではないが、徒歩で大雪山を究めることが可能なのは限られた人達ばかりである。大雪山の素晴しさは、特定の人達ばかりのものにしておくには、余りにも忽体ないし、国立公園として設定された趣旨にも添わないものと考ええる。特定の人達のために

は半日、一日歩いてもなお究め切れない特別の保護地区が設定されよう。

現在わが社のロープウェーは、黒岳の五合目までしか到達できないので、大部分の観光客は体力と時間の制約のために、山上駅から黒岳の頂上を望見しながら、思いを残して下山するよりいたし方のない現状である。

大町桂月先生は、層雲峡を鬼神の楼閣なりとし「鬼神の楼閣を下より眺めたるのみには普通の遊覧の域なり。大雪山の山水に徹底せむには、その楼閣の上に登りて大雪山の頂を究めざるべからず」と喝破された。

大雪山の山水に徹底することとは、大雪山の自然の心を感得することである。観光はそこまで高められなくてはならない。単なる物見遊山の気分できた観光客も、連峯の一角に立って大雪山の大自然に触れるときは、一切の世俗的なものから開放される。

観光の本質は心を虚しくして、その対象に融けこみ、爽快な楽しい思い出を残すことだといわれる。その思い出が人生経験の中に積みあげられ淳化されてゆくことよって、世の中がだんだん高められて行くことになろう。そのような人間形成の方向に

役立つ施設になってこそ、企業としての喜びもあり、使命感も達成されるものと思ふ。

黒岳山頂は、広大な大雪山のひろがりの外周の一角をなす天然の大展望台であって、限られた日程の一般観光客に大雪山国立公園の恩恵を享受せしめる最良の地点である。一人一人の観光客がこのうえない素晴らしい思い出を抱いて帰れるように、山頂へ徒歩で三十分程度の八合目付近までリフトを架設したいのがわが社の念願である。

北海道の観光は、従来は夏に集中しているが春、秋、冬と季節を拡大して行かなければならない。きびしい大雪山系の中で、黒岳北斜面はもともと森林限界の高いところである。それはとりもなおさず風衝が少なく、気候が温和であることを意味する。リフト実現の暁には、春山スキー場として早春の陽に輝く峯々、エゾマツやシラカバの樹林に囲まれたゲレンデなど、必ず北海道観光事業の振興に大きい役割を果たすものとなるだろう。

また冬季オリンピックに備えて、長期絶好の鍛練の場となり、選手強化のために大きく寄与するものとなることを疑わない。

(北海道林業観光(株)社長)